

日本語文法(現代)

長谷部 亜子

2021年に相次いで刊行された以下の論集は、今後の文法研究のありかたやその可能性を示唆するという点で、共通した特徴を持ち合わせる。

- ① 嶋田珠巳・鍛冶広真編著『時間と言語』(三省堂、2021年1月)
- ② 益岡隆志監修、定延利之・高山善行・井上優編『[研究プロジェクト] 時間と言語—文法研究の新たな可能性を求めて』(ひつじ書房、2021年2月)
- ③ 庵功雄・田川拓海編『日本語のテンス・アスペクト研究を問い直す 第2巻—「した」「している」の世界』(ひつじ書房、2021年3月)

①は、言語学、哲学、神経科学といった分野から、広く「時間と言語」をとらえた論考から成る。言語学に関する論考が全体の多く(全14章のうち10章)を占め、なかでも文法研究に属するものが多い。また、他言語との対照研究もありどれも現代語を研究対象としているが、それぞれの論考がお互いに直接リンクするようなことはほぼないと行ってよい。しかし、まとまりがない論集というわけではない。それぞれの論考が、言語表現を通して人が時間をどうとらえているのかを解明したいというひとつの目標(時間学の解明)に向かっている。文法研究の成果がどのような可能性を秘めているかという点で改めて考えさせられる論集である。

②も①同様「時間と言語」をテーマにした論集である。第1部現代語研究、第2部歴史的研究、第3部対照研究の3部構成である。「文法研究の新たな可能性を求めて」との副題にあるように、どの論考も文法研究のその先の可能性を追究するものとなっている。ここでは4つの論考から成る第1部現代語研究のみに焦点を当てる。定延利之氏が単著、共著で執筆している論考3編(定延利之「パーフェクトらしく見える3つの「た」の過去性」、羅希・定延利之「「た」形変化文を発する権利のありか」、羅米良・定延利之「逸脱としての動作と変化」)は、それまでに氏が提唱してきた「発話の権利」現象およびそこに関与する「会話場」を言語分析に取り入れることの妥当性を一層強固なものにする論考である。このアプローチは、例えば主文末にあらわれる「た」形にテンス性とは別にアスペクト性を認めるとする従来の主張に対し疑問を投げかけるものであり、氏はこれまでも多くの論考を発表している(上記③の論集にも2編ある)。小林ミナ「「タ形」の意味をめぐる議論を日本語教育から考える」は、日本語教育の立場からこれまでの文法研究全般のありかたを問い、どういった文法研究の成果が実際の日本語教育の現場で必要とされるべきなのかを問い直すものである。上記「た」形の議論を引き合いに、従来の研究成果と、定延氏のアプローチによる研究成果のどちらが日本語教育に有用であるかを検証している。

③は「した」と「している」に特化した、テンス・アスペクトの研究論集(全13編)である。様々な領域の論考から成り、文法研究の可能性と発展性を期待させる。

(愛知学院大学(非))